

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 24 日現在

機関番号：32203

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008年～2011

課題番号：20591417

研究課題名(和文) パーソナリティ障害合併の気分障害・不安障害の発症・経過・転帰決定因子の探索研究

研究課題名(英文) Search study for definitive factors that affect onset, course and consequence of mood and anxiety disorders with comorbidity of personality disorders.

研究代表者

大曾根 彰 (OSONE AKIRA)

獨協医科大学・医学部・講師

研究者番号：20194152

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：内科系臨床系医学・精神神経科学

キーワード：精神病理学、気分障害、不安障害

1. 研究計画の概要

(1) 現在精神科領域で全世界的に最も使用されている米国の診断基準であるDSM-IV(Diagnostic and statistical manual of mental disorders, fourth edition)には、I軸とよばれる臨床疾患の他、II軸とよばれるパーソナリティ障害の診断基準が明記されており、この2つの軸を正確に評価することが、その疾患の治療計画および予後予測等に重要である。

(2) 国内では未だ実証的研究の乏しいパーソナリティと精神障害との関連を、構造化面接法と定量的な経過観察から明らかにすることが本研究の目的である。

2. 研究の進捗状況

(1) 2008年度においては、多くのサンプルを効率よく管理するためのデータベース構築が第一の主眼点であった。データベースソフトを導入し、本研究の目的にかなったデータベースを構築することができ、この第一年度の研究実施計画は無事達成された。

(2) 2009年度は前年度において完成されたデータベースを用いて、目的となる気分障害患者や不安障害患者に対して、的確な評価尺度を用い、多彩な精神症状を定量的に測定し、経過を観察することが目標であった。当初見込んでいた程の患者数がなく、サンプル数はそれほど多くはなかった。しかし、目標達成の一段階として10月、第29回日本精神科診断学会において「パーソナリティ障害診断における構造化面接の意義—臨床診断と構造化面接による診断の比較から—」の演題で学会発表を行った。そこではこの研究の中核となる構造化面接法によるパーソナリティ障害診断の重要性が強調された。また会場からも興味ある多くの質問を集めた。

(3) 2010年度は、これまでの経過を踏まえ、研究目的を達成するため、更に臨床の場でサンプル数を増やしていた。しかし、多くの評価尺度を適応するには時間がかかり、また経過観察中に脱落する症例も少なからずあり、当初目標としていた数には満たなかった。このため、当初の計画を多少軌道修正し、より多くのサンプル数が集まるよう適応する評価尺度の見直しを行った。

(4) 2011年度は更に統計学的処理に必要なサンプル数を増やしている。

3. 現在までの達成度

③ やや遅れている。

(理由) サンプルの収集に時間がかかっているため。

4. 今後の研究の推進方策

(1) より多くのサンプルの収集のため、積極的に研究協力を求める。

(2) 患者の負担を軽減し、より多くのサンプル数を確保するため評価尺度を整理する。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計1件)

大曾根 彰、パーソナリティ障害診断における構造化面接の意義—臨床診断と構造化面接による診断の比較から—、第29回日本精神科診断学会、2009年10月17日、ハイアットリージェンシー東京(東京・西新宿)